

《I》

熱心に就職活動をする学生ではなかった。何のために就職するのか分からないまま入社試験を受け、その場で適当なことを言って、一次面接、二次面接ぐらいまでは通過したが、最終面接ともなると会社のトップや人事部長クラスが出てくるわけで、それらの人は一般論として通常の人よりも人を見る目がある。人を見る目があるから、面接に来た学生が本当はたいしてその会社に就職したいわけではないということを見破ることができるらしく、僕は、いつも最終面接で就職活動戦線からはじき出された。

大学4年も9月になって、ようやく一社から内定をもらった。あまり気が進まなかったが、かといって他にいくところもないので、仕方なくその会社に就職した。

文学部出身なのに、なぜか法務関係の部署に配属された僕が最初に命じられた仕事は、「ホウム局にいて、トウキをしてこい」というものだった。上司は、抱えきれないほどの本を僕のデスクの上に積み上げ、「調べればわかる。本に書いてある通りに書類をつくれ。書類が出来たら、俺がチェックして、社長にハンコをもらってやるから、法務局に行ってそれを出して来ればよいのだ」とのたまう。新入社員は、《社会》の厳しさを思った。

その会社は、子会社、関連会社などを10社ほど持っていて、そのほとんどの役員変更登記を懈怠していたのだ。泣きそうになりながら登記申請書だの、株主総会議事録だのを作成し、せっせと登記所にもっていったら補正を命じられ、一度は申請の取下げを余儀なくされ、登録免許税の現金還付の手続きをするなど、今から思うと大変貴重な体験を多くした。

入社一年目の12月から、会社帰りに司法書士試験の予備校に通い始めた。定時の午後6時ピッタリに退社しないと授業開始には間に合わない。退社時は、上司や先輩の白眼視に耐えねばならなかった。そこで僕は、朝、誰よりも早く出勤することを思い立った。これが功を奏したのか、周囲の対応はしだいに軟化していった。

結局、その会社は二年間勤めたのちに退職したが、気心の知れた同期にのみ打ち明けていた司法書士受験の話は、なぜか社内では公然のこととなっていて、退職が決まったときには、同期や先輩たちが、口々に「受験勉強、がんばってね」と励ましてくれた。そして、送別会の席で、「これ、みんなからのプレゼント」と言われて受け取った包みを開けてみると、机上用電気スタンドが入っていて、思わず感極まったことを今でもときどき思い出す。

《Ⅱ》

平成 14 年度の試験だったろうか。本試験を終えて半ば放心状態で帰宅し、その日の夜に解答速報がアップされている予備校のウェブサイトアクセスした。数分後、早くも不合格が確定となった。

翌朝、起床するなり、母が、自己採点はしたのかとしつこく聞く。

さらにその翌日以降も、母は同じ質問を幾度となく僕に浴びせた。数日間は聞かれるたびににはぐらかしていたが、母の根気もさるもので、僕はついに「ああ、まあまあ、かな…」と適当な返事をしてしまった。

そして、三ヵ月後、合格発表の日がやってきた。僕は結果など見るまでもない思いながらも、念のため法務省のホームページにアクセスし、自分の受験番号がないことを確認した。覚悟はできていたので、別段落ち込むことはなかった。

階下に降りていくと、母が、「どうだった？」と聞く。「あ、うん、落ちたよ…」と答えると、母はひどく落胆し、肩を落とした。いつの間にか年老いていた母が、小さく見えた。なにかすごく悪いことをしてしまったように思え、同時に、もはや自分だけの試験ではなくなっていることに今更ながら気づいた。

《Ⅲ》

平成 15 年度の受験結果が発表され、僕は四度不合格となった。そろそろ三十路も近づき、あせり始めていた。「来年を最後のつもりで、…」などと周囲には言っていたが、内心、不合格でもやめるともりなど毛頭なかった。やめることが怖かったのかも知れない。

世間では、目的を達成せずしてやめることを《あきらめる》と表現し、一方、何度でも何度でも挑戦することを《根気強い》《粘り強い》《決してあきらめない》などと表現する。その語感、前者はネガティブであり、後者は賛辞である。だが、ずっと続けてきたことを《あきらめる》ことのほうが、よほど勇気がいることではないか？《決してあきらめない》の美辞のもとに、自分はこのまま際限もなく受験を続け、いつまでたっても現状を抜け出せないのではないか…。この時期はそんな自問自答を繰り返していた。

しばらくして、この年に合格した司法学院受講生のぶねえさんが、ご自身の使っていた教材を大きなダンボールいっぱい送ってくれたのはうれしかった。

のぶねえさんの薦めもあって、司法学院に通うことにした。思い起こせば、これが

一つの転機だったのかもしれない。通い始めて間もない頃、浅尾先生に不動産登記法について質問したことがあった。浅尾先生は懇切丁寧に説明してくれた。先生の説明は多角的かつ論理的で、ぼくは時間を忘れて聞き入った。気づくと、混み合っていた講義後の教室は、僕と先生だけになっていた。

その翌週、僕が答練の会場につくと、浅尾先生は、一週間前に僕が質問した論点に関する資料を、答練の答案と一緒に僕に手渡してくれた。受け取ったときは、親切な先生だなあ、と思っただけだったが、よく考えると、資料を渡すのは顔を覚えていればできるけれど、答案を手渡しで返却するには、僕の名前を知っていないとできない、という点に思い当たり、何で僕の名前を知っているんだろうと不思議な思いがした。同時に質問した際に自分が名前を名乗るのを忘れた失礼を反省した。

その後も、僕はしばしば浅尾先生に質問するようになり、その度に先生は資料をくれたり、時には郵送してくれたりした。先生があまりに熱心に気をかけてくれるので、こちらもアホな質問はできないと思い、先生に質問をする前に自分で二、三日、よく考えてから質問するようになっていた。

平成 17 年度本試験の前々日に、どうしても気になって仕方がなかった根抵当権に関する論点を電話で質問した際に、先生が「調子はどう？ 体調に気をつけてください。」と電話口で笑いかけてくれたときは、なんだか今年は受かるような気がしていた。合格したら、浅尾先生には、いの一番に報告しようと思った。

《IV》

毎年、初詣では大学時代の友人 T と地元の成田山に行くことにしている。卒業後は年に一度しか会うことのない僕らの初詣での願掛けは、一風変わっている。互いが相手の願い事を、つまり、ぼくは T の願い事を、T は僕の願い事をお願いするのだ。これを実行ならしめるためには、内心に秘めた願いを、賽銭を投げ入れる前に相手に打ち明けなければならないのだが、これが何度やっても気恥ずかしいものだ。

T は「俺が、顔も性格もかわいい女の子と付き合えますように、って祈ってくれ」と言う。

それ、去年と同じじゃん、またかよ、と僕がいうと、
「そういうお前だって毎年毎年同じじゃねえか。いい加減、今年こそ合格しろよな！」と彼はいう。

「うるさいなあ、お前の拝み方が足りないからだよ！」

などと、混み合う賽銭箱の前でひとしきり互いに悪態をついたあと、いいか、賽銭をケチるなよ！と言い合い、僕らはじゃらじゃらと小銭を取り出して、賽銭箱めがけて放り投げた。

ぼくは、こいつには分不相応な願い事だ、神様は果たして聞き入れてくれるのだろうかという懷疑を抱きつつも、Tの願い事を三回唱えた。

ふと隣を見やると、Tは目を瞑り、手を合わせて、ぶつぶつと何やら唱えている。

喧騒のなかで彼の声は聞こえなかったが、彼の真剣な表情を見るにつけ、自分のほうが早く願い事を唱え終わってしまったことを少し後悔した。そして、今年こそは絶対に合格しなければならないという気がしてきた。合格したら、Tには真っ先に報告したいと思った。

来年は、Tよりも時間をかけて、じっくり願掛けしてやろうと思う。

《V》

初志貫徹には困難が付きまとうものらしい。受験を始めたときに、付き合っていた彼女と別れた。思うところあって、受験終了までは自分に恋愛禁止令を出すことにした。しかしそれは、一年か二年で合格できるだろう、という楽観的な打算に基づくものだった。現実はこの打算を大幅に裏切り、戦況はヴェトナム戦争のごとく泥沼化し、出口が見えなくなっていた。友人たちが次々に社内でステップアップを果たしていくなか、僕は転職と引越しを繰り返し、ついには実家に逃げ帰ってきた。

「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ 花を買い来て妻としたしむ」と詠んだのは、石川啄木だったろうか。しかし、僕には花と一緒にめでる妻も彼女もいなかった。やはり、初志貫徹には困難が付きまとうものらしい。

ある日、友人のM子と食事をする機会があった。話題は、M子が付き合っている彼氏の話から、僕の「彼女いない歴」が更新されていく話に及んだ。ぼくはM子に「きみの友だち、誰か紹介してくれよ」と冗談めかして言った。M子の友だちは、なぜかかわいい子ばかりで、それはM子自身も認めるところである。

ところが、M子はきっぱりこう言い放った。「悪いけど、あなたのように将来の方向性も定まっていない男に、私の大事な友だちは紹介できない！！」

ぼくは50%冗談のつもりだったのだが、M子は100%本気だった。M子の言うことはもっともであるが、他人から言われるとショックもまた各別である。

されども力つく女である。合格したら、この女には、二番目に報告しようと思った。

そんな情けない事件から二年が経ち、M子は結婚して郊外に一戸建てのマイホームを構え、僕は合格証書を手にすることができた。合格発表の日、携帯電話の電波の向こう側で、M子は僕の合格を自分のことのように喜んでくれた。M子夫妻が住宅ローンを完済した暁には抵当権の抹消登記を受託するという約束はどうやら果たせそうで、ほっとしている。

《VI》

平成 17 年度の本試験が終わった瞬間は、それなりに手ごたえを感じたので、意気揚々と帰宅し、姉と愛犬ゴン太（ゴールデンレトリバー）をドッグカフェに連れ出し、姉にはケーキセットを、ゴン太には犬用ミルクを振舞った。ところが、翌日、記述式の自己採点を行ったところ、驚愕のミステイクが判明。一転して、気持ちは深く沈んだ。その翌日以降も、僕を不安にさせる情報が次々と耳に入ってくる。とり急ぎ記述式の復元解答を作成し、司法学院の浅尾先生宛てに送付した。52 点満点中、34 点と診断された。

平成 17 年 9 月 28 日、その日は、司法書士試験の筆記試験の合格発表の日だった。定刻に、恐る恐るパソコンを立ち上げ、法務省のホームページにアクセスした。震えていた。心臓が耳に転移したかと思うほど、両耳が熱をもち、激しく脈を打っていた。

果たして、僕の受験番号は、あった。すぐに階下にいる両親に伝えようと思ったが、もし、番号の見間違いだった場合に、ぬか喜びをさせては申し訳ないと思い、何度も何度も受験票に書かれた番号とパソコンのディスプレイ上の番号を照合した。

何度みても、合格しているように見える。急いで階段を駆け下りて、リビングのドアを開けた瞬間、父が「受かったか？」と笑いかけた。騒々しく階段を駆け下りてくるものだから、きっと受かったのだろうと思ったのだと言う。僕は、父と母の手をかわるがわる握って、ありがとう、ありがとう、と言った。よかった、よかった、と何度も繰り返す母の目は潤んでいた。

両親の手を握ったのはいつ以来だろう。父の手には、しわが深く刻まれていた。

そして、その日は終日、ある人には電話で、ある人には電子メールで、ある人にはハガキで筆記試験の合格を報告した。その人数の多さに、いかに多くの人を自分の試

験に巻き込んできたかを改めて実感つつ、それでも、みんなに合格を報告できる幸せを思った。

平成17年11月

多くのみなさまのおかげで、自らが望む職業に就くことができています。毎日の業務のなかで少しでも周囲のお客様の役に立ち、お返しができるよう精進してまいります。